

地域高齢者の客観的咀嚼能力指標としての 色変わりチューインガムの有用性について

タニモト ヨシミ ワタナベ ミスズ コウノ レイ
谷本 芳美¹ 渡辺 美鈴¹ 河野 令¹
ヒロタ チカ タカサキ キョウスケ コウノ コウイチ
広田 千賀¹ 高崎 恭輔¹ 河野 公一¹

目的 高齢期における介護予防のための口腔機能の維持・向上を目的に、地域高齢者における咀嚼能力の客観的な評価方法として色変わりチューインガム（以下、色変わりガムとする）が有用であるか検討する。

方法 2007年4月～5月にT市に在住する65歳以上の高齢者210人（男性69人、女性141人）を対象に色変わりガムを用いた咀嚼能力と残存歯数および咬合力の測定を行い、同時に自記式質問紙調査を用いて咀嚼能力の主観的評価を行った。調査実施前に、5人の高齢者について色変わりガムの測定方法の精度を検討した。測定は「普段の食事をするようにガムをかんでください」と指示し、2分間咀嚼させた後、色彩色差計を用いて色変わりガムの「赤み」を示す咀嚼能力a*値（以下、a*値とする）を測定した。質問紙項目は①食物が普通にかめるか②かたい食物がかめるか③まぐろのさしみ、かまぼこ、らっきょう、ピフテキ、ピーナッツの咀嚼の可・不可について調べた。解析はa*値と残存歯数、咬合力および質問紙調査との関連について行った。

結果 対象者5人のa*値の変動係数は2.15～3.75%で、測定方法は高い精度を示した。地域高齢者の色変わりガムの平均a*値は男性26.0、女性22.8であった。年齢別では、男性は全ての年齢群で有意な差を認めず、加齢に伴う変化は示さなかった。女性は80歳までは年齢による差を示さなかったが、80歳以上に有意な低下を示した。性別では、どの年齢群においても有意な差を認めなかった。男女ともa*値は残存歯数および咬合力と正の相関関係を認めた。質問紙調査では、全ての項目で咀嚼可群の方が有意にa*値が高かった。また、残存歯数が20歯未満の者に限っても咀嚼難易度の低い「まぐろのさしみ」と「ピフテキ」を除く全ての項目において咀嚼可群が有意にa*値が高く、色変わりガムと主観的な質問紙調査との関連を認めた。

結論 色変わりガムの測定方法は簡便で、測定精度が高いことが認められた。また、色変わりガムは残存歯数や咬合力および主観的咀嚼能力評価と関連することを認めたことから、地域高齢者の健康づくりにおける咀嚼能力の客観的評価方法として有用であると考えられる。

Key words : 地域高齢者, 咀嚼能力, 色変わりチューインガム

¹ 大阪医科大学衛生学公衆衛生学教室
連絡先：〒569-8686 大阪府高槻市大学町 2-7
大阪医科大学衛生学公衆衛生学教室 谷本芳美